

マーク・ハドンの『夜中に犬に起こった奇妙な事件』における障害と動物

内藤 容成

マーク・ハドソン (Mark Haddon) の『夜中に犬に起こった奇妙な事件』 (*The Curious Incident of the Dog in the Night-Time*, 2003) では、15歳の少年クリストファーが隣人の犬の不可解な死の真相を探る過程が語られる。(以下、『奇妙な事件』と略す。) 数学と物理に類稀な才能を示すが対人障害を抱える主人公は自閉スペクトラム症患者であるらしい。認知的個性を持つ彼の視点から障害を周縁化する現代の英国社会が描かれるこの小説は、これまで主に障害学の理論的枠組みの中で論じられてきた。1940年代に自閉症に医学的な診断名が与えられる以前より、発達障害を持つと思われる登場人物はフィクション内で描かれてきたが、多くは物語内で周縁的な位置に配置され、19世紀や20世紀初頭の小説に多く描かれた「白痴」(“idiots”) がそうであったように、それらの表象の多くは知的障害に対する偏見の増大とステレオタイプの再生産に与してきた (Hall 114)。対照的に、ハドソンの小説は、自閉症のキャラクターを主人公かつ語り手として配し、彼に中心的な役割を与え、その視点を通して認知的個性から見た世界を描こうと試みる (Murray 46–48)。主人公の発達障害については多くの先行研究が言及する一方で、小説内に現れる動物の表象については十分な注意が払われていない。しかしながら、表題の犬をはじめこの物語は多様な動物たちの存在で満ちている。本発表ではフェミニズムとケアの倫理の観点から障害学と動物の権利運動を架橋するスナウラ・テイラーらの議論を参照しながら、この小説が健常者中心主義の世界における障害と動物の交差性を描き、両者の抵抗と解放の手がかりを示唆する物語であることを明らかにする。

認知的個性、障害の医療モデルと社会モデル

『奇妙な事件』の物語内で自閉症という診断名が言及されることはないが、クリストファーの一人称の語りを通して窺える様々な特徴から、彼は自閉症の当事者と考えられる。認知的個性を持つクリストファーの一人称による語りは、必然的に彼の視点と世間の視点のギャップを描くことになり、それが物語に独特のユーモアをもたらす。クリストファーと社会の視点のギャップはユーモアとして機能するだけでなく、健常と障害の境界を攪乱し、障害を周縁化する社会の健常者優位主義を脱構築する。クリストファーは「特別ニーズ」の学習障害を持つため、特別支援学校で学ぶが、「特別ニーズ」の生徒たちは公共の支援に依存した自立できない存在として偏見にさらされる。しかし、彼によればそのような見方は「馬鹿馬鹿しい」。なぜなら、「フランス語や相対性理論」は誰にとっても学習困難であるし、父親エドの肥満防止サプリメントや担任教師ショバーンの分厚い眼鏡のように、健常とされる人々も何らかの補助に依存しているにも関わらず、彼らは決して依存的な存在とみなされることはないからだ (43–44)。上記のような語りは社会における障害と健常の区別が恣意的なものであることを示唆する。障害学の枠組みで考えるならば、『奇妙な事件』において、自閉症は障害を本質的な医学上の異常と見做す「医療モデル」から、人は健常者中心主義の社会において障害化されるとする「社会モデル」によって捉え直される (Ray)。

クリップ、障害と動物の交差性

ロバート・マクルーアらが障害学から派生させたクリップ理論の用語を用いるならば、この小説の語りは健常と非健常との境界を攪乱させる「クリップ (不具)」化された語りであると言えるだろう。マクルーアらはクィアと同様に差別用語として用いられてきたクリップという言葉を逆手に取り、障害、ジェンダー、セクシュアリティを含むあらゆる規範的権力に抗うアイデンティティおよびプロセスを指すために用いる (McRuer, “The World Making Potential” 140; 河野 167–68)。クリストファーのクリップな語りは、障害と健常性の境界の恣意性を描くことで、障害に課された社会的スティグマを無化しようと試みる。しかし、主人公の語りが攪乱するのは健常と障害の境目だけに限らない。彼の視点は人と動物の境界をも不確かにする。『奇妙な出来事』は隣人の犬殺害の謎を追う主人公がノートに書き進める殺人ミステリー小説という形式をとっている。そもそもミステリーは基本的に殺人事件を扱うものだが、クリストファーが行うのは犬殺しの犯人探しであることから窺えるように、彼が人間と動物に向けるまなざしは社会の見方とは大きく異なっている。

『奇妙な事件』における障害と動物の問題は、四肢障害を抱える障害当事者としての体験を踏まえながら、障害(者)と動物の権利運動を架橋する作家のスナウラ・テイラーの思想と響きあう。画家で作家のスナウラ・テイラーによれば、動物の身体と障害をもった心身の抑圧は不可分の関係にある (テイラー 17)。両者とも健常者中心主義の世界において (健常な) 人間以下の存在として扱われてきたからだ。動物と障害(者)の抑圧

が分ち難くもつれ合っているとすれば、両者の解放も深く関係しているとテイラーは考える。

テイラーの思想とも響き合う、クリストファーのクリップ的思考は、物語の中盤で犬殺しの犯人が自分の父親のエドであると判明した際にも示される。エドが犯人であることが分かると、クリストファーは彼を恐れ、母の住むロンドンへ逃げることを決意する。なぜなら、「父さんはウェリントン（犬の名）を殺していた。ということは、父さんが僕を殺すことだってありえる」と考えるからだ（122）。エドの犬殺しは妻の出奔や障害を抱えた息子との将来の不安などで鬱屈したストレスが暴発したがゆえの衝動的な行為であり、クリストファーの恐怖は他者の感情の機微を理解できない自閉症患者の論理飛躍と見做すこともできるだろう。しかし、この場面のより重要な意義は「犬殺し」と「人殺し」が等価となっていることである。父は犬を殺す、ゆえに自分も殺すと考えるクリストファーの心中では、動物（犬）と人間（自分自身）の命の軽重の差は比較されていないのだ。

物語の端々でクリストファーは犬、ねずみ、カエルなど、身近な動物への共感を口にするが、彼の動物に対するまなざしは、個人的な愛着というよりも、人と動物の関係のあり方の変革を促す道徳に基づく思索だ。クリストファーの態度の根底にあるのは、人間と動物個体の生命は有限であり、はかなく、時に「取るに足りない（“negligible”）」ということへの鋭い感受性である。宇宙飛行士になることを夢見るクリストファーは、人間や動物個体の生命の限界をこえた広大な時空間に常に心を惹かれている。数学の大学入学資格試験を控えた晩、クリストファーは心を静めるために「庭に出て行って寝転がり、夜空の星を見て自分を取るに足りない（“negligible”）と思うようにした」（213）。生物個体の限界を超えた時空へ興味を持つこと、心身の傷つきやすさを意識し障害に向きあうことは、夜空に広がる宇宙に比べて自分を含むあらゆる生物個体が「取るに足りない」存在であると感じることに繋がっていくだろう。この感性を通じて人と動物の新しい倫理的関係を築く可能性が示唆されている。

結論：惑星的思考、人間中心主義の克服へ

障害と動物の交差性を軸に『真夜中』を読み解くと、クリストファーの惑星的、巨視的とも言える環境意識へと辿り着く。彼は、人間は死後「兎と同じように」地中で分子レベルに分解され、千年後には「花や林檎の木、サンザジの茂み」の一部になるから天国など必要ないと考える（33）。人間個人が体験し得ないミクロかつマクロなスケールで環境全体を捉え、自分の身体を構成する物質が生命の循環へ合流する未来を想像するクリストファーの思考は、土地を単なる土壌としてではなく、絶え間なく循環する生命エネルギーの回路として捉えるアルド・レオポルドの環境思想にも通じている（Leopold 216）。レオポルドをはじめとする環境主義やディープエコロジーの思想においては、生態系全体を重視する一方で個々の生命への道徳的配慮への関心は薄かったが（Kheel 118）、障害の視点を経て、個体の脆弱さに注目するクリストファーの世界観は、個々の動物への道徳的配慮を要求するだろう。ここに障害学と動物倫理、さらに環境倫理を繋ぎ、人間中心主義を克服する思想の萌芽を見出したい。

引用文献

- Haddon, Mark. *The Curious Incident of the Dog in the Night-Time*. Vintage, 2003.
- Hall, Alice. *Literature and Disability*. Routledge, 2016.
- Kneel, Marti. *Nature Ethics: An Ecofeminist Perspective*. Rowan & Littlefield, 2008.
- Leopold, Aldo. *A Sand County Almanac and Sketches Here and There*. Oxford UP, 1987.
- McRuer, Robert. “The World Making Potential of Contemporary Crip/Queer Literary and Cultural Production.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker and Stuart Murray, Cambridge UP, pp. 139–154.
- Murray, Stuart. *Representing Autism: Culture, Narrative, Fascination*. Liverpool UP, 2008.
- Ray, Sarah Jaquette. “Normalcy, Knowledge, and Nature in Mark Haddon's *The Curious Incident of the Dog in the Night-Time*.” *Disability Studies Quarterly*, vol. 33, no.3, 2013, doi: <https://doi.org/10.18061/dsq.v33i3.3233>.
- 河野真太郎。『新しい声を聞く僕たち』講談社、2022年。
- テイラー、スナウラ著、今津有梨訳。『荷を引く獣たち：動物の解放と障害者の解放』洛北出版、2020年。